

ヴォルテールにおける近代的歴史概念の構造

高橋安光

おそらくフランス文學史上ヴォルテールほど不當な評價を受けている作家はまれであろうし、彼に對する正當な研究ほど注目されないものも少いであろう。ヴォルテールへの偏見は、特に本邦において十八世紀フランス文學に對する極端な無關心となつて現れている。私自身その偏見から抜けきれないが、最近ヴォルテールの精讀を殊勝にも思い立ち、若干の作品に問題を求めた結果、まず歴史家としての彼を考ふるにいたつた。本論稿はそうした試みのノートにすぎないが、ヴォルテールの正しい評價に幾分でも近ずきうれば幸だと念ずる次第である。

近代の歴史科學の傳統を論ずる場合、フランスにあつては本格的には大革命以後であるが、その先驅を尋ねればピエール・ペール（一六四七—一七〇六）がまず挙げられるであろう。ボンヌエ Bosuet やマンブール Maimbourg に代表されたキリスト教的歴史觀に對するペールの科學的歴史學方法はたしかに畫期的意義をもつたが、その方法の適應におけるや文獻學的同時は考證學的傾向に走つた故、ルネサンス以來のユマニスト的博識の再評價もしくは整理に留らざるをえなかつた。ペールは歴史のもつ意味や法則を把握できなかつたのである。ペールのこの限界の根據をどこに求めるべきか。その解決を人々は十八世紀を通じて課題とし、フランス革命を経てはじめてペールの限界を

ヴォルテールにおける近代的歴史概念の構造

歴史學において超えることができた。この間十八世紀啓蒙思想家たちの果した役割はペールの歴史學方法の打開であつたにもかゝらず、きわめて非歴史的烙印を押されている事實は多くの問題をわれわれに提供する。ペールの思想的弟子ともいふべきヴォルテールが啓蒙思想家として更に師をどれほど超克することができたか。この點に私の設問理由が存在する。

ペールは哲學から歴史に入り、ヴォルテールは現實から歴史に入つた。若冠廿一歳でルイ大王を諷しバスチーユに投獄されたヴォルテールは現實への反抗兒として出發したのである。ルイ十四世歿後、すでにヴォルテールの眼前には絶對王制の諸矛盾が露呈され、官僚機構の腐敗や階級的混亂、財政逼迫や國威失墜、貴族僧侶の擅權と民衆一般の困窮は掩うべくもなく、世はあげて名君アンリ四世の復活を求めていた。ヴォルテールの初期の抒事詩『アンリアード』はこうした時代の欲求であつたのだ。彼においてこうした時代への反抗が單なる反抗としてではなく、歴史的問題として意識され、表現されるにいたつた理由及び過程はどのように解明されるべきであらうか。

ヴォルテールの兩親は共にポワトゥ州の比較的富裕な商人の出身であり、母マルグリット・ドマルルの家系はすでに法服貴族の末席に連つていた。五人姉姉の末弟に生れたヴォルテールは早く母を失い、父の手で育てられていたが、長じてルイ・ル・グラン學院に學んだ。そこで彼は幾人かの師と生涯の朋友を見出すが、そのジェズイット系の學院の寮生活においてすでに自己の身分を知らせられた。貴族や僧侶の子弟は一部屋を各人獨占しているのに反してブルジョワ出身の子弟は五人ずつ一部屋に押しこめられて監督された。多感な少年ヴォルテールの心に焼きつけられた貴族への反感と自己の階級への執着は種々な形を以て將來を決定したといえないであらうか。しかし當時のブルジョワ

ジューは十九世紀以降のそれと異り、絶對王制の成立及び崩壞過程にあつてはきわめて進歩的役割を果したから、ヴォルテールがこの階級の有能な代辯者として登場した理由もそこにあるのである。こうした彼にさらに決定的性格を與えたのがイギリスの思想であり、社會であつた。一七二五年騎士ロアンなる者と決闘沙汰を起して再びバスチーユに閉じこめられたヴォルテールは六ヶ月を経て國外追放という條件の下に出獄し、以後三年をイギリスで過した。イギリスにおいて彼の目にふれ耳にしたものはフランスの絶對王政と對蹠的な立憲君主政體であり、信仰の自由、思想の自由、科學の發達であつた。現實はともかく、彼の目に映じたイギリスはフランスに較べればまさにユートピアであつたのだ。有名な『イギリス便り』（別名『哲學的書簡』）はかくして執筆されたのである。この作品は彼がイギリスで見聞した事柄を彼一流のジャーナリストの天才で書簡體にまとめあげたものだが、單にイギリス文化の謳歌にとどまらず、フランスの封建制に對する宣戰布告とも言うべく、追放の身を一層きびしく賭するものであつた。このようにヴォルテールはイギリスの社會から強力な思想的武器を受けつぎ、彼自身の問題に取り組んでいつた。

こゝで特にとりあげるべき彼の歴史作品としては『シャルル十二世の歴史』（一七三一年）、『ルイ十四世時代史』（一七五一年）、『各國民風俗史試論』（一七五八年）等があげられ、これらの作品を裏すけるべき小説や戯曲や論文を多數あげなければならぬ。彼の全作品に及ぶこの歴史的性格が物語るものは、前述せるごとく彼がいかに時代に關心をいだいていたかということである。これは決して歴史に關心をいだく者すべてに言いうることでなく、ヴォルテールの場合特に歴史と現實が結びつきえたこと、またそれ故に彼がベールより更に一步前進しえたことに問題があるのである。

世界文化史の理念の成立。ヴォルテールが生きたフランス、それはすでにルイ十四世を失い、オルレアン公攝政につゞくルイ十五世の時代にあり、きわめて典型的に成立した絶対王制がまたきわめて必然的に崩れゆく過程にあつた。古代のギリシヤ・ラテンにも優る不滅を信じられた太陽王の時代も古典主義的理想の夢を破つて消え去つていつた。人々は己の眼を信じかねつゝも時代の變化を認めないわけにはゆかなかつた。ルネサンス以來つねに時代の底流として存在してきた自由の思想は一切の權威に對する不信を表明して登場する。すでにルイ十四世の在世中からこの懷疑の眼は國の内外より向けられていたのだ。それはもはや懷疑のための懷疑ではなく、新しきなものかを求めるための懷疑であつた。人は過去への不信と反省を投じて未來を求めようとした。もはや時代は意識された歴史を要求する段階に到達していた。したがつてこの啓蒙期の世代は過去への反省より出發する。『シャルル十二世の歴史』の冒頭でヴォルテールは宣言する。

「われわれはアリストテレスに従つて想起しよう、不信こそあらゆる教智の基礎である、と。」(ed. Hachette, t. 15, p. 11)

「なんと多くの矛盾した事實や作り事が常識に働きあつてくることであろうか。それらのなにものをも信じてはならない。」(Ibid.)

ベールにおける懷疑的相對主義は健全な意味でヴォルテールに受けつがれ、彼の歴史觀及び思想一般の基底をなした。かくして人は始めて理性による歴史を望むことができる。しからばヴォルテールによつて把握された理性の歴史

とはいかなる理念的構成を有し、またいかなる時代的背景と結びついていたのであろうか。

ヴォルテール以前の歴史観さらに世界観はキリスト教圏内のそれに限定され、しからずんば無可有世界への憧憬もしくは逃避にすぎなかつた。しかし時代はすでにキリスト教的ヨーロッパ以外の世界を見出していった。地理的發見、産業の發達、貨幣經濟の進歩はヨーロッパの行き過ぎの打開を植民地政策に求めていた。これは西歐近代國家群の發展段階における宿命ともいえよう。その一つの思想的反映として従來のキリスト教中心的世界観はようやくその矛盾を暴露し、自由主義的ブルジョワジーの批判するところとなつた。たとえば當初植民に成功したイスパニヤはカリツクの反動分子により内部的に崩壊し、宗教的により自由なオランダやイギリスに乗ぜられ、舊教國フランスは強大を誇りつゝも植民においてもつとも遅れることとなつたのである。近世に入つて宗教は良き意味でも悪き意味でも政治と密接に關連をもつにいたつてゐる。こゝでベール説くところの宗教的寛容は純粹に教義上の問題としてではなく、その政治的效果において重要性をもつにいたつた。しかもヴォルテールにいたつて寛容の精神はベールにおけるよりも更に積極性に富み、キリスト教への反抗と異教の包容とを政治的に意圖するものとなつた。こゝにおいてヴォルテールはキリスト教中心的世界観を打破すべく啓蒙的世界史を構想するにいたつたのである。

キリスト教世界への反撥がヴォルテールの世界観を擴大し、眞の世界史的視野に導く動機となつたが、それと平行して世界人的理念の形成を見のがすことはできない。このコスモポリタンの思想はヴォルテールにおける絶對平和主義的市民思想より出發している。つまりそれと對立するものとして當時の愛國主義が存在していたわけである。

「良き愛國者となるためにしばしば爾余の人間を敵にまわさなければならぬのは悲しむべきことである。」(Di-

ヴォルテールにおける近代的歴史概念の構造

tonnaire Philosophique" éd. Garnier, t. II, p. 176.)

「良き國民たることは自己の町が商業によつて富み武力によつて強大になることを欲することである。」(Ibid.)
これは重商主義による富商強兵に狂奔する絶対主義國家の標榜する愛國主義である。これに對してヴォルテールが
いだいたコスモポリタンの人間像はどのようなものであつたか。

「或る一國が勝てば他の一國が敗れるし、その國が征服されれば不幸な人々がつくり出される、これは明白なこと
である。かくのごときが人間の條件である以上、自國の強大を望むことは隣國の不幸を望むことである。祖國がこれ
以上大きくなることも小さくなることも又金持になることも貧乏になることもないように望む人間があるとしたら
ば、その人は宇宙の市民となるであらう。」(Ibid. t. II, p. 176)

キリスト教徒たる前にまず人間であると同様に人は愛國者たる前に世界人でなければならぬ。『シャルル十二世
の歴史』のごとき戦記物においてヴォルテールが表現せんとしたのは戦争の悲劇性に他ならなかつた。『ルイ十四世
時代史』においても彼は繰返し戦争の愚劣さを説いてやまない。

「古代ローマ人以來私は戦勝によつて富み榮えた國民をまつたく知らない。イタリヤは十六世紀において商業によ
つてのみ榮えた。オランダも、もしスペインの寶船を略奪することしかしなかつたならば、また老大なインドがその
國力の榮養とならなかつたならば、永くは續かなかつたであらう。」(éd. Hachette, p. 409)

「ヨーロッパの諸國民においても戦争は幾年かの後には勝利者をも敗北者とも同様に不幸にしている。戦争はあ
らゆる富の運河が流れこむ深淵である。」(Ibid. p. 410)

こうした徹底せる平和主義は度重なる戦亂の教えるところであつたろうが、それが思想としての強さをヴォルテールに鼓吹したのはイギリスのクエーカー教徒の英雄的な平和闘争であつた。

「クエーカー教徒と妙な名をつけられている人々があるが、彼らは世界の他のすべての人間から彼らを區別せしめるところの彼らの特權（戦争否定、譯者）を彼らの兄弟すなわちロンドンのキリスト教徒たちによつて放棄すべくよきなくされる日まで、一世紀以上も戦争を避け、憎んできた。したがつて人は全力を盡せば人間を殺さないで済むのである。」（“Prix de la Justice et de l'humanité” éd. Hachette, Œuv. Complètes, t. 31. p. 371）

いうまでもなく人は平和のうちにあつてはじめて文化を論じうるし、未だ平和を獲得しえざる状態にあつても、少くとも平和を望むことによつてのみ文化を豫想しうるのである。したがつてヴォルテールのごとき平和主義者によつて人類の幸福すなわち文化が問題とされたことは當然であらう。

「多數の軍隊を統率した人々の名前以外にはなにも残つていないし、それらの何百という戦闘によつて人類に残されたものはなにもない。しかし私が諸君にいまお話するところの偉大な人々とは未だ生を稟けざる人間たちに純粹にして持續的な快樂を準備した人々である。二つの海をつなぐ運河の開通、ブサンのごとき藝術家の繪畫、美しき悲劇、眞理の發見は宮廷の年代記や戦場の物語よりも千倍も高價なものである。諸君も知られるように、私の言う偉人たちこそ最上の人々であり、英雄というものは最高等の人間なのである。」（“Le Siècle de Louis XIV. Chapitre XXXIII”）

あやまてる英雄主義によつて人類の蒙つた不幸は長い間つゞいていた。人類は自らの不幸の原因を知ろうともしな

かつた。それは自然と歴史に對する無智から生れてくる。十八世紀フランスの啓蒙思想家の多くはその自然の領域において人間の不幸の源を探りうると信じたのである。しかし自然が人間に對する時、それは歴史的自然としてとりあげられなければならないことに、啓蒙思想家たちは思い到らなかつたようである。その中でヴォルテールは素樸ながら逸早く自然と人間を歴史的に意識しようとして、人類の幸福の歴史を描こうとしたようである。それまで國王や將軍や貴族や殉教者の歴史は幾多つゞられてきたが、一個の時代史すら試みられなかつた。したがつて『ルイ十四世時代史』の巻頭に掲げられた次の言葉はおそらく近代歴史學の第一歩を飾るものであろう。ヴォルテールの意氣や思ふべしである。

「こゝにおいて書かれようとしているのは單にルイ十四世個人の生涯ではない。さらに大きな對象を提出しているのである。まさに後世のために描かんと試みるころのものは一個の人間の行爲にあらず、かつてもつとも進歩せる世紀における人間たちの精神である。」

ヴォルテールにおけるかくのごとき世界文化史的理念が作品においてどのように具體化されたか、またそれはいかなる社會的背景のもとで遂行されたのであろうか。私は以上においてその一般的輪郭及び關係をのべたにすぎない、さらに作品について彼の歴史觀を構成する諸要素を抽出してみよう。

ルイ十四世時代史。この作品はすでに一七二九年頃から構想され、一七三四年から書きはじめられて一七三八年までに相當進捗したようであつたが、そこで政府の壓迫により一旦中止され、一七五〇年に再び手をつけられ、一七五

一年ベルリンで一應完成されたが、その後一七五六年に再度加筆改篇され、一七六八年に到つてはじめて決定的な出版を見た。ヴォルテールはそのほとん半生をこれに費したのである。これはルイ十四世時代のフランスを中心とした政治、經濟、社會、宗教、文藝、科學等々文化全般にわたり、且つ常に世界各國の狀勢を畫きつゝ話をすゝめたもので、全四十九章より成る。それらの各章は一見斷片的であるが、後世の史家の難ずるところく内面的統一を缺くものではない。十九世紀のオーギュスタン・チエルリはヴォルテールの多面的な描寫を批判して百科全書派的智識欲の散漫さを攻撃しているが、なにもものをも知り盡そうとする啓蒙期の知識欲を方法論の缺如と片ずけるチエルリは明らかに時代錯誤を犯すものであり、ヴォルテールの時代における獨創性を無視するものである。勿論私は『ルイ十四世時代史』を完全な意味における近代的歴史學方法の所産であるなどと申しているのではなく、それへの偉大な萌芽が見られることを強調したのである。たしかにヴォルテールのうちには世界文化史的構想がうかがえるし、斷片的にせよ社會經濟史的見解が芽生えているが、總じて彼の歴史觀が心理主義的であり觀念的であることを私は否定する者ではない。なおかつ私はあらゆる制約をみとめつつもヴォルテールの優れた一面を紹介しなければならない。種子はいかに小さくとも實を結ぶものであるから。

細かく立入る前にまず注意すべきことは、ルイ十四世の時代はヴォルテールにとつて過去の時代であつたとはいへ、ルイ十四世によつて確立された絶對王制はルイ十五世の時代に直結するものであつたから、ルイ十四世時代を批判することはとりもなおさずルイ十五世時代を批判することとなり、つまりヴォルテールは『ルイ十四世時代史』を書くことによつて彼自身が屬する現代史を畫いたことになるのである。しかしそれは決して時代の混同ではない。なぜな

らば、彼は常に前代の問題を彼の時代に比較し還元することを技術的に意識していたからである。しかもそれが彼の現代史たるの意義は時代的混同を伴わずに十分承認されるところである。

ヴォルテールはルイ十四世治下のフランスがいかなる政治的經濟的構成を有したかを素樸ながら明快に示してくる。そして彼は絶対王制なるものがいかなる面において矛盾をはらんでいるかを具體的に指摘する。

「要らざる事 *affaires extraordinaires* と呼ばれるものがたえずつくり出されていた。すなわち笑うべき官職が設けられ、人頭税から逃れようとする人々によつてたえず購われていつた。というのは、人頭税という課税はフランスにおいては腐敗しきつており、且つ人間は元來虚榮に生れついでいるから、そうした恥辱から逃れようとする欲望はつねに各種の偽購を産み、それらの新しい官職に伴う莫大な給料が苦しい時代にありながら求められる傾向にあつた。なぜならば、より良き時代になればそれらの官職がなくなるであろうと人は考え及ばなかつたからである。」

(*Le Siècle de Louis XIV* ed. Hachette Classique, p. 412.)

人頭税は市民フランス人と農民と職人たちのみ課せられ、貴族と僧侶は免れていた。これは勃興しつゝあつたブルジョワジイにとつて耐えがたい屈辱であつた。そこでブルジョワたちは競つて金力を用いて高價な官職を買い、法官貴族に成り上つて人頭税から逃れようとした。こゝに思わしい官職賣買制度が默許されるにいたつたのである。これは國庫の逼迫を救う政府の手段でもあつた。したがつてこの官職賣買こそは絶対王制下の身分的矛盾の大きな表れであつたといえよう。ヴォルテールはこの制度をたえず皮肉つている。

「貴方は私に司法官の職の賣買についてお話しになりませんか、全世界のうちでフランス人だけが知つているあの

素晴らしい法律の取引をね。あの人々（フランス人たち）は世界中でもつとも偉大な商人に違いありませんよ、なぜなら彼らは人を裁く権利をも賣つたり買つたりするんですからね。……わたくしたちの國（イギリス）では人は土地と土地からとれる收穫物しか賣れないように法律で命じられていますが、フランスでは法律そのものが官職の値段をきめてゐるのですね。」（éd. Hachette. Œuvres Complètes. t. 28, p. 115.）

反面、ブルジョワジーの勢力はもはや動かすべからざるものとして絶対身分王制の鼎の一つをなすにいたつたのである。ヴォルテール自身この階級に属していたから、彼は必然的にブルジョワジーの擡頭を歴史の前面に押し出さざるをえなかつたし、したがつてブルジョワの發展を骨子として歴史をながめざるをえなかつた。

「中位の階級（ブルジョワジー・譯者）は産業によつて富んだ。大臣や宮廷人は富裕ではなくなつた。というのは貨幣の数が半分近くも増加したのに、給料や年金は變らなかつたし、商品の値段は二倍近くも騰起したからである。」

（"Siècle de Louis XIV", éd. Hachette Classique, p. 416）

「貴族たちは昔ほど贅澤でなくなり、中位の階級にあつては一層贅澤が可能となつた。それは人間たちの間の距りを一層なくした。かつては下層の者にとつて貴族に仕えることしか生きるすべがなかつたが、今や産業は百年前に知られなかつた何干という道を拓いてくれた。國家の財政がいかなる形できりまわされようともフランスはほと二千萬人の住民の労働のうちに無限の富を有するにいたつたのである。」（Ibid., p. 417）

ヴォルテールはブルジョワジーの發展をあらゆる領域において絶対王制の歩みと結びつけて考え、歴史の流れを産業の進歩によつて測定しようとしてつとめた。これがたとえ單なる階級的反感から出發したにせよ、これほどの論理性を

ヴォルテールにおける近代的歴史概念の構造

以て表現された以上、もはや單なる對立意識にのみ歸することはできない。それは一つの思想であり、觀念であつた。從來、商工業は下賤な職業として疎んぜられ、弓馬の道に非ずんば人間の本職と考えられなかつたのである。コルベールによる重商主義の擡頭もなをそうした偏見を是正することができなかつた。ヴォルテールはモンテスキュウの『法の精神』を批判した中でつぎのようにのべている。

「へすべての低い商業はギリシヤ人のうちにあつては卑しむべきものであつた」(『法の精神』中の一句、譯者附) 私はこの低い商業というものをモンテスキュウがどのような意味に理解しているのか知らないが、私の知るところでは、アテネではあらゆる市民が商賣をしていた、プラトンは油を賣り歩き、かの煽動家デモステネスの父は鐵くす商であつた。労働者の多くは外國人もしくは奴隸であつた。われわれが特に注目すべく重要なことは、なんら商業をもたないスパルタは別として、商業はギリシヤ共和國における諸々の品位と相反するものではなかつた。」(éd, Hachette, Œuvres Complètes de Voltaire, t. 28, p. 91)

この見地から彼は宰相コルベールの業績をきわめて高く評價する。

「コルベールは知識と天才とをもつて財政のやりくりに成功した。彼はシュリ公にならつて當時の老大な濫費と略奪とを禁ずることから出發したのである。收税はできうるかぎり簡素化された。そして彼は天才的な經濟的手腕によつて人頭税を減じ、國王の富を増大させた。御承知のように一六六四年の記念すべき勅令によつて當時の金額で百萬エキュが毎年手工業と海外貿易の獎勵にあてられたのである。」(“Siècle de Louis XIV” éd, Hachette classique, p. 413)

コルベールの政策は重商主義と呼ばれ、富國強兵策の典型であつた。ヨーロッパの列強またこれを實行したのである。しかし不幸にしてフランスはコルベール主義を全うすることができず、列國に遅れをとるにいたつたことは、重商主義に對する批判となつて現れてきた。それがいわゆる重農主義である。ヴォルテールはいわば重商主義と重農主義の過渡期に生きていたのである。したがつてコルベールに對して多大の尊敬を有しながら、彼はコルベールの缺陷を衝かざるをえなかつた。

「この大臣が非難されるもつとも大きな誤謬は、麥の輸出を促進しなかつたことである。永いこと麥は國外に持ち出されなかつた。リシリユウ内閣以來、農村は等閑にされていた。一六六一年の飢饉が農村の荒廢を決定的にしたのである。しかしその荒廢も勞働の助けを借りれば自然に償いうるものなのだ。この不幸な年にパリ高等法院の出した命令は、原則的には正しいように見えたが、内亂中に同法院から引き出されたあらゆる命令と同様に結果的にはほとんど不幸なものとなつた。麥の交易のためになんらかの結社を結ぶことは商人たちに嚴罰をもつて禁ぜられ、個人も穀物を貯えることが禁ぜられた。それは一時の飢饉にはよかつたが、結局は忌むしいものとなり、あらゆる農業者を没落させた。こうした禁令を危機偏見の時代にあつて破壊することは民衆を騷起せしめることになつたでもある。」(Ibid, p. 107)

ブルジョワジーと貴族僧侶との對立均衡の下で徹底的に搾取されつゞけていたのは農民であつた。しかも政府の農民對策は苛烈をきわめていた。ヴォルテールによると、ルイ十四世時代のもつとも有難い農民政策の一例として、子供を十人持つた百姓には一切の税金を免除するという特典が與えられていたとされるが、これは勞働力の確保という

きわめて奴隸的政策にすぎず、當時子供を十二人持った貴族に二萬の年金が與えられて軍人養成を強いられたのと同様である。コルベールの天才を以てしてもこの農村の疲弊は慰すべくもなかつた。さらにヴォルテール自身も農民一般に同情を示しつつも解決を得られなかつたのである。特にヴォルテールが農民と稱する階級は比較的富裕な農民層を指し、下層農民に對する彼の態度には未だ封建的もしくはブルジョワ的偏見がみられ、この領域における彼の見解はきわめて皮相的であつたと言わなければならない。

「小土地所有農民や小作人がフランスの若干の地方におけるほど裕福な王國は世界中にほとんどあるまい。たゞイギリスのみが優越を競いうる。若干の地方で *arbitraire* から *proportionnel* へ變えられた人頭税は車や葡萄園や庭園をもつ土地所有農民の財産を確固たるものとするに役立つた。しかし人足 *mainoeuvre* や労働者 *ouvrier* は働くに必要な程度に限定される必要がある。それが人間の本性である。この龐大な人間たちを貧乏にしておくべきであるが、悲惨にすべきではない。」(Ibid, p. 416)

絶對身分王制を支える鼎の一つとして僧侶階級が占めた社會的位置もまたヴォルテールの大きな課題である。彼においてはキリスト教そのものの原理的問題(神の存在。攝理。啓示等々)とキリスト教會組織の社會的問題(教會。僧侶の特權。宗教裁判。諸々の儀式等々)とは一應別個の問題として夫々とりあげられている。無神論を奉ずる啓蒙思想家の多くは(ディドロ、ドルバック、エルヴェシウス、ラメトリ等)神の存在を否定するに急であつたがために神學もしくは宗教の根本的原理を攻撃した。しかしそれがどれほど成功したか疑問である。というのは、信仰は理性によつて承服せしめられるものではなかつたからである。「神を信するが故に汝等は誤つてゐる」と攻撃したところで「神を信ぜざ

るが故に汝等は誤つてゐるのだ」と反駁されれば水かけ論に陥る。たとえ無神論が自然科学によつて論證されたとしても信仰家を納得させることはできなかつた。それは何故であらうか。おそらく理性がその威力を發揮しうる限界すなわち信仰家をも納得せしめうる分野において利用されなかつたからであらう。この點でヴォルテールは他の十八世紀の思想家よりも啓蒙的であつた。彼はキリスト教の教義を批判することによつて理性を信仰に對峙させる無意味さを豫知し、キリスト教會の現實的な矛盾や惡を理論的に攻撃することによつてその原理的曖昧さを暗示しようとしたのである。これは遙かに効果があつたのだ。神を信する者といえども人間としての自己の生活に矛盾を發見すれば自然と反省の機を與えられるからである。したがつてヴォルテールはキリスト教を間接的に批判するためにキリスト教會そのものの制度を批判する。その中心的對象として當時の僧侶の社會における在り方が問題とされたのである。まず彼は僧侶を社會における一階級として認識する。

「國家の三階級のうちでもつとも數の少いのは聖職たちである。しかし僧侶が國家の一階級をなすに到つたのはフランスにおいてのみである。……さて國家の一階級として認められた僧侶は主權者のきわめて繊細な、またきわめて巧緻な行爲をつねに要求してきた。ローマ法皇と連係を保ちつゝ、同時にガリア教會の諸自由、それらは古い教會の權利であるが、それらの自由を支持し、司教職の權利に牴觸せずに司教たちを臣下として服従させ、他の場合には彼らを裁判官たらしめ、また國家の要求に彼らを奉仕させ、且つ彼らの權利を損わぬこと、これらすべてはルイ十四世がつねに有していた巧みさと堅實さとの混合を要求したのである。」

ヨーロッパ各國におけると同様にフランスにおいてもキリスト教は複雑な關係を國家權力との間に有していた。そ

これらの關係は神學的もしくは哲學的思索の埒外に存在する。元來ヴォルテールは理神論もしくは自然宗教の徒であり、宗教に關する知識においてもまた人後におちるところでなかつたが、彼が特に歴史の領域で論ぜんと欲したことは宗教の形而下的在り方であつたのだ。彼によれば、上述せるごとく僧侶たちは國家における一階級を構成するが、さらにそれは上級の僧侶（樞機卿、一司教、司教、僧院長等）と下級の僧侶とに分れ、互に利害を異にするグループを成していた。

「全教會の収入は九千萬リーヴルとなつてゐるが、これで上級の聖職者九萬、一般聖職者十六萬、その他教會に雇われる人々を養わなければならなかつたのである。修道僧の多くは年に二百リーヴルしか貰つてゐなかつたが、正規の修道院長たちは年二萬リーヴルを取つてゐた。こゝに待遇の大きな差があつた。そのため多くの不幸が存在したのである。」（*Siècle de Louis XIV. éd. Hachette classique, p. 456*）

宗教戦争はそれらの多くの不幸のうち最大のものであつたといえよう。ヴォルテールは從來教義の差異にのみ求められた宗教戦争の原因を僧侶階級内部の利害對立に歸し、ファナチズムを以て宗教戦争の主因となすことに反對している。

「あらゆる形の抵抗を憎む權威に對抗して古代の教會を復活させた共和的精神の自然の戦にこの地上を荒廢させた新たなペストの起源を尋ねることができようか。はじめ穴倉や洞窟の中でローマ皇帝たちの法律を非難していた祕密の集りは徐々に國家の中心に一つの國家を形成した。それは帝國のうちに隠された一つの共和國であつたのだ。コンスタンチヌス大帝がそれを地下から引き出して王座の傍に坐らせたのである。やがて高位高官と結托した權威

(ローマ法皇廟、譯者)は、それまであらゆるキリスト教徒の團體を鼓舞していた民衆的精神と對立するにいたつたのである。」(Ibid, p. 465)

問題を時代的に具體化して考えれば、カトリックに對するプロテスタントの對立が當然とりあげられる。フランスにおける宗教的内亂に終止符を打つたと思われたナントの勅令が再びルイ十四世によつて廢止されるや、ジェズイットの擡頭と共にプロテスタントへの迫害がますますきびしくなり、國外に逃亡するプロテスタントは相當數にのぼつていた。ヴォルテールはこの新教徒壓迫を二つの面から非難した、すなわち寛容の精神と經濟的損失とである。彼の歴史觀からすれば後者の面からの批判も當然であろう。宗教改革以來、プロテスタントのきわめて實利的傾向は近代資本主義と並行し、マニファクチュアにおける技術的發達に寄與するところ大であつた。したがつてプロテスタントの國外逃亡によつて蒙つたフランスの打撃は大きかつた。

「イギリス及びデンマークの各國王、特にアムステルダム市はフランスのカルヴァン派を自國に逃避させ、彼らに生活を保證してやつた。アムステルダムのごときは逃亡者たちのために何千という家を建てることさえ約したのである。」(Ibid, p. 475)

ヴォルテールによれば、かの有名なクリスチナ女王はつぎのようにフランスの新教徒壓迫を皮肉つてゐる。

「私はフランスを考えるに、それは丁度おとなしく辛棒しておれば完全に癒るのに手や足まで切斷してしまふ病人のようなものである。」(Ibid, p. 477)

ヴォルテールをポツダムに迎えたフリードリッヒ大王もダランベールに宛てた書簡の中でナント勅令の廢止によつ

ヴォルテールにおける近代的歴史概念の構造

て流れこんできたプロテスタント系の技術者や職人がドイツの産業發達に多大の貢獻をなしたと述べている。(ディルタイ著『フリードリッヒ大王とドイツ啓蒙思潮』邦譯、參照)

この問題でもヴォルテールの満足を獲ちえたのは一人コルベールのみであつた。

「國家の産業の復活者、商業の開拓者と見なされるコルベールは、諸々の技藝や手工業や海運業の多くの新教徒を採用した。」(Ibid, p. 472)

プロテスタント主義の發展を通じてヴォルテールが求めたものはブルジョワジの發展過程と密接に結びつけられるではあるまいか。しかしプロテスタントのみがローマン・カトリックのイデオロギーに對立する下級僧侶の利害を代表するものではなかつた。同じカトリックの内部においてもジェズイットの反動に對抗する種々の運動が行われたことをヴォルテールは指摘する。たとえばポール・ロワイヤル運動や靜寂主義(モナシスム)等がそれである。しかしそれらの流派の收めた社會的效果はきわめてうすかつた。ヴォルテールの適確な見解によれば、それらの運動の企圖するところは教義上の革命もしくは遮斷にあり、ならん政治的經濟的社會的背景を伴わない觀念的立場にあつたから、それが受けた支持は一部の限られたインテリにすぎず、一般大衆に浸潤することができなかつたのである。

最後に私はルイ十四世治下に發達した文化についてヴォルテールがどのような見方をしていたかを紹介し、それらの見解が彼の歴史觀といかなる關連を有したかについてふれてみよう。一般に文學史が論ずるところによると、十七世紀後半はルイ十四世の保護の下に幾多の傑作が産み出されたとされている。事實、コルネーユ、ラシーヌ、モリエール等の劇作家をはじめ、ボワロー、パスカル、ラ・ブリュイエール、ボシユエ、フォントネル、ヘヌロン、ブル

ダルー等の文人が文學史上例のない迫力と品位を示した。それは文學のみならず宗教、思想、藝術、科學等のあらゆる部門について言いうることであつた。しかし果してそうした文化の興隆がルイ十四世の政策によつてのみ遂行されたのであろうか、この點においてわれわれは從來の公式的見解に少なからぬ不満を感じ、疑惑を持たざるをえない。すでにヴォルテール個人の證言にもあるようにルイ十四世の時代は決して善政の御世ではなく、絶對王制特有の缺陷と弱點を有し、どうみても偉大な世紀 *le Grand Siècle* とは稱されないのであつた。しかも多くの巨匠を産み出しえた理由を一體どこに求むべきであらうか。それは絶對王制の成立そのもののうちに含まれる對立矛盾（貴族僧侶とブルジョワとの對立）の面から、解決されなければなるまい。當時の巨匠のほとんどがブルジョワ階級の出身であることは、その解決に大きな緒口を與えてくれよう。一代の詩聖としてルイ大王の恩顧を受けたボワローですら初期の諷刺詩において官廷貴族と法官貴族の群がるバリを後にして「歸りなんいざ田園まさに荒れんとす」の憤怒と失意の情を歌い、プチ・ブルジョワ的反抗を謳つていのである。かの大喜劇作家モリエールも市民階級の健全なモラルを代表してもつとも悲劇的な抵抗をつづけた。彼らは自分たちの敵が誰であり何であるかを知つていたので。こうした對立の意識こそ彼らの想像力に天才的な飛躍を許したのである。したがつてフランス古典主義文學を正しく理解するためにはルイ十四世の文化政策をきびしく批判し、その時代の基盤底流を探らなければならない。

たしかにルイ十四世は各種のアカデミーを設立し、文人藝術家に年金を與え、文化活動に刺戟をもたらしたといえよう。一六六三年には科學翰林院が設立され、イタリヤからドミニコ・カシニ、オランダからホイヘンス、デンマークからレーメル等の學者が招聘され、また天文臺や王立植物園やアカデミー・デ・ベル・レットルが設立され、植物

學、地理學、考古學の發達を促した。王立圖書館はルイ十四世の時代に入るや三萬冊以上の藏書を誇り、ヴェルサイユ宮殿は世界美術の粹を集めていた。かくして一見ルイ十四世の光榮は完成されたかに思われるが、それはまづたく皮相な現象にすぎないのである。なぜならば、それらの文化施設や文化所産は逆にルイ十四世個人の光榮のために利用されていたにすぎなかつたからである。すなわち全世界から収集された植物は王家の庭の裝飾となり、科學翰林院は國王の軍隊に奉仕し、アカデミー・デ・ベル・レットルはルイ大王の功績を顯彰するのに餘念がなかつた。それらはまづたくルイ十四世の走狗にすぎなかつたのである。ヴォルテールはそうしたルイ十四世の文化政策の僞瞞を看破していた。

「一六六三年フランス・アカデミーの會員若干の手で、ルイ十四世の功績をメタルによつて後世へ傳えるべく結成されたアカデミト・デ・ベル・レットルがはじめて民衆に役立つようになつたのは、單に君主のことに専念することを止めて古代の研究や諸々の發見や事實の探究に専念するようになつてからである。」

したがつて當時の傑作のうちには計らずもルイ十四世に對する批判が見うけられるのは一・二にとゞまらない。ヴォルテールはその代表的作品としてフェヌロンの『テレマック』(ユリシウスの息子テレマコスを主人公とした新しい君主小説)を重視している。

「人は『テレマコス』のうちにルイ十四世の政府に對する間接的批判を見出しうると信じた。素晴らしい勝利を獲得したセノストリス、贅澤を起し必要を忘れたイドメネーアは、かの國王の繪姿として現れている。」

彼によれば、この『テレマック』は英譯版だけでも十四種も見受けられたそうであり、それがルイ十四世に對抗す

ヨーロッパ各國の人心に與えた影響は非常なものであつたようだ。しかしこゝで問題にしたいのはそうしたヴォルテールの卓越せる批判である。おそらく彼においてはじめて文學は政治と結びつけられて反省されるようになったのではあるまいか。勿論、どこまで論理的反省をなしたか期待することはできないが、彼はルイ十四世時代の文學を愛しつゝも常にルイ十四世に對する攻撃を忘らなかつたのである。したがつて一市民ヴォルテールにとつてヴェルサイユにおける贅を盡した虚飾は鼻もちならぬものであつたから、彼はヴェルサイユ宮に對抗してパリの美化を要求する。それは國王及び宮廷貴族に對抗するブルジョワの町パリの擁護であり、一七八九年にいたつてはじめて實行された理想でもあつた。

「中途で挫折し無用に歸した事業だが、あのヴェルサイユに水道を引くために拂つたマントゥノンの事業に要した龐大な費用をパリを美化しルーヴルを宗成するために用いたならば、またヴェルサイユにおいて自然を破壊するため要した費用の五分の一をパリに用いたならば、パリはそのすべてにおいてチユイルリやポール・ロワイルを並べたほどに美しくなり、おそらく世界でも最も素晴らしい町となつたであらうに。」(『Siècle de Louis XIV', éd. Hachette, the Classique, p. 397)

しかもルイ十四世の時代は文學のみならず他のあらゆる藝術においても驚歎すべき發展を見た。ヴォルテールは美術、音楽、舞踏の發達を賞揚した最後の頁においてフランス外科手術の發達を誇つてゐるが、これは色々な意味で注目すべき見解であらう。

「各個人の樂みと國家の光榮のために寄せる、これらすべての技術を通覽したが、われわれはあらゆる技術のうち

ヴォルテールにおける近代的歴史概念の構造

でもつとも有用なものを不問に附して過ぎるわけにはゆくまい。その技術においてフランスは全世界の國民を凌ぐものである。私は外科醫學について語ろうとするのである。その世紀（一七世紀）における外科醫學の發達はきわめて急速且つ顯著であつたから、並々ならぬ技巧を必要とする病氣や手術のためにヨーロッパ各地から人々はバりにやつてきた。この國においてのみ必要な道具が完全に製産されていたのであり、フランスはそれらの器具を各國に供給していたのである。」(Ibid. p. 444)

従來外科醫學のごときは内科醫學に比較して下等な職業と卑しめられ、大學における正規の部門を構成することができなかつたが、相繼ぐ戰亂を通じて急速に發達し、外科醫の地位を高めるにいたつたのである。しかもヴォルテールは外科手術という技術を藝術と並べて位置づけたのである。技術は今や學問や藝術と全く同等の地位を與えられるにいたつた。これは明らかにブルジョワジの發展であり、時代の進歩を物語るものである。この進歩に對する確信こそブルジョワジのもつとも特筆すべきイデオロギーであつた。それは十八世紀フランスの啓蒙思想家たちの偉大な所産たる『百科全書』の根本理念でもあつた。しかしヴォルテールの偉大さは、進歩という概念を單に空間的技術的問題として論じたばかりでなく、時代的歴史的問題として意識したことにある。そこに彼が近代歴史科學の祖と見なされる祕密もふくまれているのである。

パスカルにおいて科學史上意識された進歩の概念が十八世紀に入つて文化史的イデーとして完全な意味を有するまでには幾多の論戦がくり返されたのである。その代表的なものとして古典文學派ボワローと近代文學派ペローの間に交わされた『古代派近代派論争』Querelle des anciens et des modernesがある。前派の主張に従えば、近代人と

いえどもみなギリシヤ・ラテンの古典文學に範を求め、理性の絶對的規準に則つて自然を描寫しなければならぬ。後者の主張に従えば、近代人は古代人をはるかに凌ぐ文化を有する以上、古代人を模倣する必要はなく、近代人自らの生活を描寫しなければならぬ。前派は時代を超越して古典的理性の絶對性を信じ、後派は時代の進歩を認めてルイ十四世の世紀を歴史上最高の時代と觀じた。この論争は一見ペロー派がすぐれているように思われるが、さらに検討するならば、絶對王制への屈從が進歩という美名の下に隠されていることを人は見出すのである。それに對してボワローは古代を謳歌することによつてルイ十四世に反旗を翻したとみられないであろうか。しかもボワロー派に屬する巨匠たちによつて多くの世紀の傑作が作り出され、フランス古典主義時代を現出したことを合せ考えるならば、理論的には進歩的と見えたペロー派が實際はきわめて反動的であつたこと、その故に偉大な傑作を残しえなかつたことを理解しうるのである。こうした混亂せる當時の進歩の概念内容がヴォルテールにあつてはどのように理解されていたであろうか。

「人はルイ十四世の時代をアウグスチヌス大帝のそれに比較した。個人の努力と事件は比較にならない。ローマとアウグスチヌスが世界における重要性はルイ十四世とパリのその十倍以上であつたのだ。……しかしなお考えなければならぬのは、古代のローマやアウグスチヌスのごときものは今日の世界にみられないとしても、ヨーロッパ全體からみれば全ローマ帝國をはるかに凌ぐものがある。アウグスチヌスの時代には一つの國家しかなかつたが、今日では多くの、開けた、進んだ、強力な國家が存在し、ギリシヤ人やローマ人の知らなかつた藝術を所有している。しかも一世紀以來それらの國家のうちでルイ十四世によつてなんらかの形成をみた國家以上にあらゆる領域で輝きをも

つた國家はなかつた。」(Ibid. p. 402)

つまり彼は古典の優秀性をみとめつゝも近代の進歩をみとめざるをえなかつたのである。しかしそれは決してルイ十四世への屈服としてではなく、むしろルイ十四世を超えて行くものであつた。したがつて黨派的に誤解をきたした「古代派近代派論争」の課題はヴォルテールにあつてきわめて純粹に(歴史的に)解決されているのである。こうして把握された歴史的進歩の思想はやがて絶対王制に對する破壊口となる。この意味においてヴォルテールは歴史家として他の啓蒙思想家に見られない革命的性格を加うるにいたつた。

以上、私は『ルイ十四世時代史』を通してヴォルテールの歴史理念を追求したが、いさゝかヴォルテールに翻弄された感がないでもない。というのは、この作品はすぐれて堅牢な名文であり、私ごとき文學青年を寄せつけない肌合いを有するからである。しかし私はこの作品が近代歴史文學史上不滅の金字塔であることを疑わない。よろしく専門家諸兄のすぐれた研究が期待されるべきであらう。

(參考書)

- Œuvres Complètes de Voltaire, éd. Hachette, 1893.
 Lettres choisies de Voltaire, éd. Delalain Frères, 1884.
 Gustave Lanson: Voltaire, éd. Hachette, 1922.
 D.-F. Strauss: Voltaire, (traduit de l'Allemand)
 Georges Pellissier: Voltaire philosophe, éd. Armand Colin, 1908.
 Henri Sée: L'Évolution de la pensée politique en France au VIII^e siècle, éd. Félix Alean, 1925.
 Philippe Sagnac: La Formation de la Société française moderne, t. I (1661—1715)